

主 題：キリストの十分性を脅かす偽りの教え③**聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章20-23節****テーマ：“キリストの十分性”を惑わせる偽りの教えはどんなものだったか？**

今朝も私たちはコロサイ人への手紙2章特に20-23節を通して、「キリストの十分性を脅かす偽りの教え」について学んでいきます。きょうの箇所をもってついにコロサイの手紙も半分まで到達します。これまでに学んできたことを覚えているでしょうか？1, 2章を通して確かに多くのことを学んできましたが、何より私たちは、キリストがいかに十分で、すべてにまさる偉大なお方なのかということ、パウロのことばから学びました。大切な教理を考えたわけですが、来週からはいよいよその教理を土台とした実践的な教え、信仰者の実際の生き方に関する知恵を3章から見ていきたいと思えます。そのことも楽しみにしながら、きょうは残された土台の部分について一緒に考えてみましょう。いま一度16-23節全体をお読みしますので、それぞれよく神様のことばに耳を傾けてみてください。

コロサイ2：16-23

「:16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のことについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。:17 これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。:18 あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使い礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、:19 かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらがもとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。:20 もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、:21 「すぎるな。味うな。さわらな」というような定めに縛られるのですか。:22 そのようなものはすべて、用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。:23 そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」

さて、きょうの内容に入る前にここ二週間にわたって考えてきたことを少し思い出してみてください。私たちは今「キリストの十分性を脅かす偽りの教え」について考えています。コロサイの教会に入り込んでいたにせ教師たちは、「キリストが十分なのだ」と、そのようには満足していませんでした。だからこそ彼らは「キリストだけでは足りていない。私たちの救いや霊的な成長にはキリストに加えて、あれやこれやが必要なのだ。」と言って、人々を惑わしていたのです。そして特に私たちが今見ている16-23節のこの塊の中で、パウロは彼らが訴えていた三つの危険な教えについて挙げてくれました。

○十分性を脅かす偽りの教え：三つの危険な教え**1. 律法主義 16-17節**

一つ目に挙げられていた教えは16-17節にありましたが、その教えは「律法主義」と呼ばれるものでした。律法主義を信じていた者たちというのは、「救いにおいても霊的な成長においても、キリスト+律法を守り行うこと、人の行いがかせない」と信じていました。それゆえに彼らは、キリストに加えてさまざまな伝統や習慣、儀式といったものを人々に強いるようにしていたのです。結局のところ律法主義者にとって大切だったのは、キリストや神様のことばよりも、自分たちの外側の正しさでした。自分勝手な基準に人々を当てはめて、人の外側だけを見て愛もなくさばこうとする、そんな彼らはまさ

にプライドにあふれた危険な者たちでした。でもそういった律法主義者たちが教会に入り込んでいただけではありませんでした。

2. 神秘主義 18-19節

また先週、私たちは二つ目に入り込んでいた危険な教え「神秘主義」と呼ばれるものについて、18-19節で見ました。神秘主義を信じている者たちは、「救いにおいても、霊的な成長においても、キリスト+主観的な感情や体験というものが欠かせない」と信じていました。神様がもうすでにはっきりと啓示された客観的なみことばの真理、それに信頼することよりも、自分たちが幻を通して得た自分たちの知識や経験というものに重きを置いていたのです。そういったものに重きを置いていたからこそ、彼らはみことばを追い求めようとはしませんでした。そうではなく自分の感情や特別な体験、特別な経験を追い求めて、そして自分が追い求めるだけではなく、自分と同じような体験をしていない者たちに対して、霊的に劣っている、とジャッジして非難していたのです。結局のところ、神秘主義者にとって大切だったのは、キリストや神様のことばよりも、自分本位の体験でした。「こんなことを神様は私に語ってくれました。」「自分だけがこんな特別なものを示されました。」と。そのようにして周りから自分の特別な神秘的な経験が称賛されることを望んでいただけではなく、そのような勝手な基準によって人々を非難しようとする彼らは、まさにプライドにあふれた危険な者たちだったのです。

「律法主義」「神秘主義」と見ました。キリストを十分だと思っていない偽りの教えはどんなものであれ、その焦点はいつも本来向けるべき神様やキリストではなく、自分自身に向いていました。自分の思いや自分の考え、自分の感情、そういったものによって膨れ上がっていた者たちは、十分なキリストやみことばに従いたい、拠り頼みたい、とはしなかったのです。偽りの教えを覚えるときに、私たちはそこにプライドや高慢さというものを見たのです。そういった危険な惑わしがコロサイの教会中に入り込んでいました。だからパウロは「そういった危険な教えに惑わされないように。」と警告を与えていました。「私たちのいのちや私たちの成長の源であるキリストから決して離れないように。どんなときもそのキリストに堅く結びついているように。」と強く求めていたのです。これは私たちも同じです。今を生きている私たちも、キリストに、神様の十分なみことばに、しっかりとしがみついて歩み続けるということ、それはとても欠かせない大切なことでした。

3. 禁欲主義 20-23節

さて、すでに二つの危険な教えを見ました。でもこれがすべてではありませんでした。きょうは最後にもう一つだけ20-23節に出てきていた三つ目の危険な教えを考えてみましょう。最後三つ目に教会に入り込んでいた危険な教え、それは「禁欲主義」と呼ばれるものでした。にせ教師たちは十分なキリストに満足せず、キリストに加えて「禁欲主義」というものを訴えて、兄弟姉妹の間に混乱をもたらしていたのです。「禁欲主義」と聞いても、律法主義や神秘主義と同じであまり聞きなじみのないものかもしれません。この「禁欲主義」ということばは「訓練」や「修行」「肉体的な鍛錬」を意味するギリシャ語「アスキーシス」が語源となっています。そして特にここから「人が救いや霊的な成長を達成するために、自分の肉体的な欲望を厳しく抑制すること」を表しています。ある人は、このことばを次のように定義していました。「(禁欲主義とは)厳しい自己放任、自己否定、さらには自己犠牲によって聖さを達成しようとする試みである。」と。ですから皆さん、この教えというのは、人が神様に近づくために、自分自身の欲や自分の快樂、そういったものを抑制することを強く求めるものでした。その抑制のかたちというのはさまざまです。例えば食べ物や飲み物を断ったり、持ち物をすべて捨てたり、自分のからだに苦行を課したり…いろんなかたちで自分の欲を押さえつけようとする、そういったことが実際に教会の歴史の中でも行われてきました。禁欲主義者は、そのような厳格な自己否定や痛み苦しみが、神様から罪の赦しを得たり、また、さらなる霊的な成長をもたらす手段であると信じていたのです。そのような苦行を手段として考えていたのです。これはしてもいい、これはしてはいけないという

んな厳しい戒めを自分自身に課して、それをしっかりと守り行っていくこと、それによって苦しんでいくことが、神様の前に正しいと認められる、神様を喜ばせる方法なのだ、と考えていたのです。ですから、皆さんに覚えていてほしいことは、これまでの偽りの教えと同じです。まちががなくこの禁欲主義を信じている者たちも、キリストの恵みは十分なものだ、とは考えていませんでした。禁欲主義を信じている者たちにとっては、「キリスト+自分の苦行」だったのです。それが救いや霊的な成長をもたらすものだと考えていました。そして、そのような危険なことを信じている偽りの教師たちがコロサイの教会の中に入り込み、人々の目をキリストではなくて、それ以外のものに向けさせようとしていたのです。

当然、そのことをパウロはよしとはしませんでした。愛する兄弟姉妹たちに対して「皆さん、そのような危険な教えがありますから、そのような誘惑に惑わされないように。」と忠告していたのです。そしてそのことを訴えるために、パウロは特に今私たちが見ようとしてこの20-23節で、なぜこの禁欲主義というものを拒むべきなのか、いかにこの教えがむなしくて、そして、ただキリストだけが十分に価値のあるものなのかを、三つ理由を挙げて私たちに明らかにしてくれていたのです。それぞれ順に考えてみましょう。

●禁欲主義を拒むべき三つの理由：

1) この世的なものだから 20-21節

まず一つ目に、禁欲主義を拒むべき理由、それは、この教えが「この世的なものだから」です。20-21節にこんなふう書いていました。「:20もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、:21「すぎるな。味わうな。さわるな。」というような定めに縛られるのですか。」と、パウロは疑問を投げかけていました。この箇所を見たときに、皆さん気づきますね。「もし」ということばで始まっていました。でもこれは何も、パウロがここで可能性とか、仮定の話をしようとしていたのではありません。ここでの「もし」というのは、「だから」というようなことばでも訳すことができるものでした。つまり仮定の話ではなくて、ここでパウロは、事実の話をしようとしていたのです。パウロはコロサイの兄弟姉妹たちに対して、最初に、ある揺るがぬ事実を思い出させようとしていました。「あなたがたはもうすでにキリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのだから」とその現実を強調していたのです。私たちが以前見た2:11-15の中でも、パウロは、キリストの成し遂げた十分なみわざを通して、信仰者たちがすでにどんな者へと変えられたのか、信仰者にもうどんなものが与えられたのかを教えていました。特に12節にこう書いていますね。「あなたがたは、パプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」と。「あなたたちはキリストとともに葬られることになりましょう」ではなくて、「葬られ」と。「キリストとともによみがえらされるでしょう」ではなくて「キリストとともによみがえらされたのです。」と。事実を宣べていました。「かつて神様に逆らっていて、自分自身のために生きていたその古い自分というのはもう十字架の上でキリストとともに死にました。」と。そしてただ死んだだけではなくて、神様のために生きる新しい者として、「もうキリストとともによみがえりました。」と。イエス・キリストを信じ受け入れた者であればだれであれ、神様によって罪の赦しや、新しいいのちが与えられたのです。ただ恵みによってもうすでに成し遂げられたみわざでした。コロサイの兄弟姉妹の中にもこのようなすばらしい働きは、もうすでに起こっていました。

またもう一度2:20に戻ればそこに「この世の幼稚な教えから離れ」ということばが出てきていました。ここで出てきた「この世の幼稚な教え」ということばに思い当たることはありませんか？以前私たちが見た箇所の中で同じことばが使われていました。2:8の後半部分を特に注目して読んでみるとこんなふうに出てきていますね。「注意しなさい。」の後「それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教え

によるものであって、キリストによるものではありません。」と。これと同じことばがこの2：20で使われているのです。「この世の幼稚な教え」とはどんな意味だったでしょう？このことばはもともと「基本的とか初歩的な原則、学びの基礎となるもの」を表していました。だれもが当たり前知っているような、みなが一番初めに習うような基礎的な教えのことを表していました。その内容があまりにも初歩的なものであるからこそ、霊的に成熟したおとなにとっては、そんな教えはあまりにも幼稚でむなしく思えるようなものだったのです。ですからこのことばは、そのように「この世の幼稚な教え」「初歩的な教え」とも訳すことができました。でも同時にこのことばはその意味を表すのに加え、別の意味でも考えることができました。何だったか覚えています？2017年版の聖書を見れば「この世の幼稚な教え」とは訳されていなくて「この世のもろもろの霊」と書いていたのです。なぜそんな意味になるのか？それは、神様やみことばを取り除こうとしているすべての教えの背後には、「この世のもろもろの霊」何よりサタンの働きがあったからでした。そういったもろもろの霊、何よりサタンの働きを表すその意味でも訳すことができましたのです。ですからここでは「この世の初歩的な幼稚な教え」と訳してもよいし、「もろもろの霊、サタンの働き」と訳してもどちらの意味にも取ることができました。それを思い出した上で考えていただきたいのは、それがどちらの意味であったとしてもパウロが言わんとしていたことは明白だったということです。20-21節で、パウロはコロサイの兄弟姉妹たちに対してははっきりと疑問を投げかけるのです。「どうしてですか？あなたがたはもうすでにキリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れましたよね？！どうしてまだこの世の生き方をしているかのように、定めに縛られ続けているのですか？かつての罪や悪魔に捕らわれていたその生き方から、キリストによって自由になったのに、なぜ再びにせ教師が押し付けているそんな定めや言いなりになろうとしているのですか？」と。にせ教師たちはそのようにして、彼らがかつての生き方に戻そうと、定めを課そうとしていたのです。いったいどんな定めを課そうとしていたのか？その例を21節に書いていました。「**すぎるな。味わうな。さわるな。**」と。それがコロサイの人々に対してにせ教師たちが訴えていた定めでした。そういったものによって彼らは縛られそうになっていました。「**すぎるな。味わうな。さわるな。**」何を言っているのでしょうか？

「**すぎるな**」…このことばには「何かや、だれかに触れたり掴んだりする」という意味があります。特にこのことばは福音書の中で何度も何度も登場していて、イエス様が人々にさわって病を癒すような場面にも用いられていました。このことばは、ただ触れるだけではなくて、意識的に意図的に相手に触れようとする意味も持っているからこそ、「すぎる」とか「掴む」というふうにも訳されているのです。単にさわるというよりは、もう少しすぎるとか掴むという意味で訳されていました。にせ教師たちは人々に対して「**すぎるな**」と命令していました。

「**味わうな**」…これは、そのままそのことばの通りです。「何かを舌で味わうこと」を表しています。二週間前に見たことですが2：16をもう一度見てみると、パウロは、教会に入り込んでいたにせ教師たちが、食べ物と飲み物について勝手にいろんな規則を課していることを、問題視していました。律法主義者たちが食べ物や飲み物についていろんなルールを課していたのです。おそらくそういった者たちの中には、人々に対して「**味わうな**」というような命令をする者たちもいたのでしょうか。

「**さわるな**」…このことばは最初のもとの非常によく似ているものでした。この「**さわるな**」ということばにも「何かにさわると」という意味が含まれているのです。ですから一番初めのことばも「何かに、だれかに触れる」という意味を持っていたし、この三つ目のことばも「何かにさわると」という意味を持っているのです。どうして同じようなことばが二つ続いているのかと思う方もあるかもしれませんが。いろんな註解書ではこの点に関してさまざまな議論がなされているのです。でも一つ言えるとするれば、最初のことばは言ったように、つかんだりするというような意味合いがありました。どちらかということ、より長い間何かを触れていることを意味しています。そして最後のことば「**さわる**」ということばは、

より短い間さわっていることを表現していました。ですから、時間的に少し区別をつけることができるのです。「さわる」という同じようなことばですが、時間的に違いをつくることによって、パウロはおそらく、偽りの教えを教えていた教師たちがもっていたその定めが、段階を経て徐々に厳しくなっているような様子をここで表そうとしていた、と考えることもできます。皆さん、わかりますか？「すぎるな」「味わうな」「さわるな」とありますが、段階的に厳しくなっていますね。禁欲主義者たちは長い間「すぎるな」というものから「味わうな」となり、「味わうな」から「ちょっとでもふれるな」というふうに訴えていたわけです。あとになるほど厳しい戒めになっていました。禁欲主義者たちはそのようにして厳しい戒めを課せば課すほど、より厳格に自分の欲を制御すれば制御するほど、救いや霊的な成長がもたらされると信じていたのです。神様が喜んでくださると信じていたのです。まさにこの教えの土台には、自分の鍛錬というものがありました。自分の鍛錬だけがそこにありました。そしてそれはまちがいでした。そういった外側の行いだけ、ふるまいだけが人に救いや霊的な成長をもたらすということ、みことばは教えていません。いやむしろ、たとえ人がどんなに自分を否定したとしても、自分の欲を制御したとしても、その人の心が変わっていなければ、主の前に大きな問題だということをお教えているのです。禁欲主義者たちはそういった大きな問題を抱えていました。外側の鍛錬に関して彼らは強く重きを置いていたのです。

少しだけ勘違いしてほしくないことがあるので覚えておいてください。訓練の話をしていますが、信仰者の歩みにおいて、私たちが罪から離れるために自分自身を訓練すること、自分自身を鍛錬するということは、私たちにとって大切なことです。少し前にも一緒に見ましたが「キリストの弟子として日々自分を捨てて、自分の十字架を負ってついてきなさい。」とイエス様は教えられていました。弟子たちに求めていたのです。また、今見ているコロサイの手紙を記したパウロ自身も彼の歩みに関して、Iコリント9：26-27を見ると彼はこのように証ししてくれていました。「:26 ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。:27 私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」パウロは「私は自分のからだを打ちたたいて従わせる」と言っていました。人に宣べ伝えていながら、自分が失格者にならないように、と彼は自分自身のことを鍛錬していたのです。律していたわけです。ですから私たちにとって神様の助けを祈り求めながら、みことばに従ってキリストに似た聖い者へととなっていくことを私たちが熱心に求めていくということ、訓練していくということは必要不可欠なことでした。パウロもそのようにして生きていたのです。でも皆さん、確かにそれは必要なのですが、同時に気をつけておかないといけないことがあります。というのは、私たちはそのような自己鍛錬や自己否定というものを考えるときに、その自己鍛錬や自己否定自体を誇りとするような状態に陥ってしまうことがあるということです。それ自体は良いものだけれど、でも、それを自分の誇りとするような誘惑に陥ってしまうこともあるのです。それはいったいどんなときになるのか？それはいろんな状態を挙げることができます。周りの人よりも自分自身を厳しく律していたら、そのような自分を見て、私はすごいことをしていると誇ることもそうでしょうし、自分を否定しているその自分を見て、こんなにも私は自分を否定しているからこのような行いを神様は見えて喜んでくださると思い込むかもしれませんし、そのようにして自分のことを訓練すること、鍛錬することがただ周りの人にほめられるためと、それが目的になってしまうかもしれません。自分をみんなが見て自分が称賛されることで、人前で見せびらかすということにつながることもあるかもしれません。またそれだけではなくて、自分自身と同じようにしていない人や自分よりも律することをしていない人を見て、「あの人は全然だめだ」と心の中で不満を抱いたり、非難していたりするかもしれません。そうして自分自身が自分を訓練する中で、人と比べて自分を誇ったり、いろんなまちがった態度になってしまうことがあるのです。もちろんそんなプライドにあふれた批判的な態度はまちがっていました。たとえそれ自体は良かったとしても、

いつも言われているように、神様の前にいつも問われるのは、その心がどこにあるか、でした。危険な禁欲主義は「すぎるな。味わうな。さわらな。」と言って、コロサイの信仰者たちに「してはいけません。」という定めを強要しようとしていました。だからパウロは改めて警告していたのです。「皆さん、あなたがたはもうすでにキリストとともに死にました。キリストとともに葬られました。キリストとともによみがえりました。新しい者へと変わったのです。かつてのそんな定めからもう離れました。ですから、かつての生き方に戻ることはしないように。」と。禁欲主義がこの世的なものであるから、だから私たちはこの教えを拒むべき。それが一つ目の理由でした。

2) むなしなものだから 22節

次に二つ目に禁欲主義を拒むべき理由、それはこの教えというものが「むなしなものだから」でした。続く22節にこう書いています。「そのようなものは、すべて用いれば滅びるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。」ここで禁欲主義の抱えているむなしさというものを、パウロは特に二つの点から説明をしてくれています。まず一つ目にこう書いていました。「そのようなものは、すべて用いれば滅びるものについてであって」なぜこの教えがむなしなのか、それはこの教えというのが、用いれば滅びるものに焦点を置いている、からでした。用いれば滅びてしまうようなものに焦点を置いていること、価値を置いていること、それがこの教えのむなしさの原因だったのです。もう少し別のことばで言えば、この教えというのは、永遠に価値のあるようなものではなくて、一時的でなくなってしまうようなものに価値を見出そうとしていた、ということです。どういうことか？これもちょっと考えてみてください。今少し見てきましたが、禁欲主義というものは、ひたすらに物質的なものを拒んだり、それらを否定しようとしていました。例えば、食べ物や飲み物です。彼らは食べ物や飲み物を断って、そして自分のからだを厳しく律することを通して救われる、神様に喜ばれるその聖さを達成できる、と考えていたのです。彼らの関心がいったいどこにあったのか？彼らの関心は、いかに食事を制御できるかどうかにか捕らわれていたのです。もちろん、そのような厳格な行いが人に救いや聖さをもたらすことはないということは当然のことですが、でもここでのむなしさというのは、彼らがそのように捕らわれていた食べ物や飲み物というのは、一度食べてしまえば文字通り消えてなくなってしまうものです。食べ物や飲み物は一時的なものに過ぎません。でも禁欲主義者たちは、そうやって使ったら一瞬にして滅びてしまうようなものに焦点を当てて、永遠に価値のある、本当に価値のあるキリストを見ようとはしなかったわけです。むなしいと思いませんか？まさにイエス様が言われていたことばが当てはまるでしょう。ヨハネ6：27でイエス様はこんなことを言われていたりもしました。「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」彼らは大きな問題を抱えていました。永遠に価値あるそのキリストに心が捕らわれて、キリストを見て、キリストに信頼して歩んでいこうとするのではなく、用いれば消えてなくなってしまうようなむなしいものに焦点を置き続けていたのです。そんな禁欲主義は確かにむなしいものでした。

でもそれだけではありません。もう一つのことばがその続きに書いていました。「人間の戒めと教えによるものです。」と。この教えがどうしてむなしなのか、それはこの教えが、人の戒めと教えに焦点を置いている、からでした。人の戒めと教えに焦点を置いているということは、非常にむなしいことだったのです。別のことばで言うと、この教えは、神様の戒めとか教えに基づこうとするのではなく、人の戒めや教えに土台をおこうとしていたのです。限りのない測り知ることのできない神様の知恵を横に置いて、限りのある人の知恵に拠り頼もうとしていました。それはむなしいですよね。もう少しだけ考えてみますが、ここでパウロは、二つのことばを並べて使っていました。「人間の戒めと教え」と。「戒めと教え」という表現がここで用いられていたのです。この「人間の戒めと教え」というこの二つのことばの組み合わせは実は珍しいもので、この二つと一緒に登場しているのはこのコロサイ2：22とあと二つ

だけ、新約聖書マルコ7：7とその平行箇所マタイ15：9にしか登場しません。あとでぜひ両方を見てくださいと思いますが、この二箇所に通じていたのは何かというと、どちらもイエス様がイザヤのことばを引用してパリサイ人たちの偽善的な態度を非難していた、ということです。マルコ7：6-8だけ見ます。イエス様がパリサイ人たちの問題をこのように言われていました。「：6 イエスは彼らに言われた。「イザヤはあなたがた偽善者について預言をして、こう書いているが、まさにそのとおりです。『この民は、口先ではわたしを敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。：7 彼らが、わたしを拜んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』：8 あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」ここで「人間の教え」と訳されていたこのことばは「人間の戒め」と訳されていたものと同じで、「教え」と訳されていることばは前のところでも「教え」と訳されているものでした。イエス様はここでパリサイ人たちが抱えていた問題をはっきりと明らかにしていました。どんな問題を抱えていたのか？確実に言えるのは、この者たちは心から神様を礼拝していたのではなく、口先だけで神様を崇めていました。偽善的でした。心からのものではなかったのです。でも同時に、ここにこう書いていましたね。特に8節「あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」と。彼らが抱えていた大きな問題、それは神の戒めを捨てて、自分たちが考えた人の教えを守っていたことでした。神様のことばよりも、人のことばに重きを置いていたのです。そしてこの性質というのは禁欲主義者の中にも、また前に見た律法主義者の中にも見て取ることができる大きな過ちでもありました。このような者たちはいろんなものをただ禁止して、みことばが教えていることではなくて、自分たちが決めたそのルールを守り行うようにと。そこに霊的な価値を見出していたのです。

このような考え方は当時だけではなく、今の時代も別に変わっていません。私たちの周りにもこのような考えは存在しています。例を挙げたほうがわかり易いかと思いますので、レイ・ステッドマンという牧師の証を載せました。こう書いています。「私はキリスト教福音派の教会で育ちましたが、そこではクリスチャンが常に避けなければならない特定の事柄があると言われ、これらのタブーを遵守していれば、仲間として受けられるだけでなく、実際に神を喜ばせることになるかと教えられました。クリスチャンは酒を飲んではいけない、ダンスをしてはいけない、タバコを吸ってはいけない、映画に行っではいけない、トランプをしてはいけない、小説を読んではいけない、と教えられました。これらの禁止事項は、たいてい私たちに対して叩きつけられました。これらの事柄のいくつかを控えることが、霊の鍛錬として完全に適切であることは否定しませんが、何かを辞めること自体が神に喜ばれるという考えは間違いなのです。」ポイントは最後に書いていました。「何かを辞める、その行為自体が神様に喜ばれるという考えは間違いなのです。」と。どんな問題があったのか？簡潔にまとめてみれば、ここでは人の基準や人の考えなどがみことばの基準よりも上にありました。そのようにして人の基準というものが、その人の救いや霊的な状態をはかる秤となっていたのです。「これはしてはいけません。」「あれもダメです。」と、みことばからではなくて、その人の考えに基づいた基準が課せられて、それを守っていなければ救われていないとか、それを守っていなければ霊的に劣っているという、そういったまちがった考え方が教会の中にありました。

少し考えてみてください。皆さん、私たちはみことばを見るときに、私たちがキリストにあって自由というものを持っているのだと聖書が教えていることを見取することができます。私たちはキリストにあって、いろんなことが許されているのです。でもそのようにいろんなことが許されているからといって、私たちは何でもかんでもしていいという話ではありません。私たちは罪に対しては、何があろうとも、どんなときも離れなくてははいけません。罪に対しては離れるのです。罪に対して離れるだけではありません。罪に陥らないために、自分自身の身を守るために、自分が難しさを覚えたり、葛藤を覚えたりするようなものがあるのなら、みずからそのものから距離を取るということも一つ大切なことになるのです。自分がまちがって罪に陥ってしまわないように、こういったものからみずから完全に距離を置

こうすることも一つの知恵です。また「自由があるから何でもしていいんですね」「罪ではなかったら何でもいいんですね」ともなりません。みことばが教えているようにほかの兄弟を愛しているからこそ、兄弟姉妹対のつまずきになるような事はしないようにするのです。またそれらに加えて、私たちはどんなことをするにしても、自分自身のためではなくて、何よりも神様の栄光のためにするということは決して欠かせないのです。みことばははっきりと言っていました。Iコリント10:31「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光現すためにしなさい。」映画を見に行くことにしても、音楽を聴くことにしても、旅行することにしても…挙げればきりはありませんが、もしそういったことをするとしたら、罪に陥らないように気をつけて、人のつまずきにならないように気をつけて、そして自分のためではなく、神様の栄光になることをと、心を吟味して喜んでそれをするなら、私たちはキリストにあって自由を持ってそういったことも楽しむことができるのです。神様が祝福として与えてくださったいろいろなものを私たちは楽しむことができます。

でもそういったものに対して、私たちが時に陥ってしまうのは、私たちの持っている人の戒めや、人の考え、人の基準というものが、そういったものを排除しようとするのです。まちがってはいけないこと、ここでのポイントは、人の戒めや人の考えや人の教えというものが神様のことばを超えることがあってはならない、ということです。人の基準や人のルールをただ守り行うこと、それを人々に押し付けて、そして外側だけを見て判断してそのことで非難したり、自分の基準を人々に勝手に当てはめてそれによってさばくことがあってはいけないということです。そのようなものに陥らないためにどうすればいいのか？私たちはいつもみことばに立ち返って、何よりも自分自身の心のみことばを通して吟味することです。神様が見ておられる私たちの心を吟味することです。

危険な禁欲主義はそのように、本当に目を向けるべき永遠の価値あるものであるキリストから人々の目を奪って、神様のことばではなく、用いれば滅びてしまう人の戒めや教え、そういったむなしなものに人々を誘導しようとしていました。人々を惑わしてそちらに行かせようとしていたのです。だからパウロは警告していました。「むなしなものだから、本当に価値のあるものではないから、だからそういった教えを拒みなさい。」それが二つ目の理由でした。

3) 何の欲にも立たないものだから 23節

そして最後三つ目に禁欲主義を拒むべき理由は、この教えというのが「何の役にも立たないものだから」です。最後23節にこう記されていました。「そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」パウロは言っていました。そのようなものは「賢いもののように見える」と。確かに禁欲主義、禁欲主義者というものは外から見てみると、一見教えに熱心で、すばらしい歩みをしているかのように思えたりします。なぜなら、自分の身を厳しく律して、例えば貧しくあろうとするような者たちというのは、周りから見たときに、あの人はすごい歩みをしていると尊敬や称賛を集めるようなものかもしれません。彼らが持っている自分勝手な基準に基づいてささげられる礼拝も、わざとらしそうな見せかけだけの謙遜も、自分のからだを痛めつけるような厳しい苦行も、周りから見ると、いかにも霊的な人物が行っているようなものに見えるかもしれません。でも悲しいことに、それは外側だけでした。内側を見れば、それは確かに愚かで無価値なものだったのです。何の役にも立たないものでした。いったいどうしてなのか？最後にこう書いていましたね。23節「賢いもののように見えますが、」の後「肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。」と。禁欲主義にどれだけ熱心であらうとも、どれだけ懸命に励んだとしても、それによって私たち自身の心の罪の問題がなくなることはなければ、どれだけ努力や行いを積み重ねたとしても、私たちにとって何よりも大切な救いも霊的な成長も、自分の力で達成することは絶対にあり得ませんでした。先週も見ましたが、私たちにとって必要な救いも、私たちにとって必要な霊的成長も、どこにその源があるのか？それはただキリストのうち

にのみでした。キリストのうちにのみ見出されるそんな救いを、そんな霊的な成長、そんな満足というものを、それ以外のものに見出そうとしたとしても、それはただ失敗に終わってしまうものだったので。この23節に関して、カーティス・ヴォーンという註解者も次のようにまとめていました。「禁欲主義的な規則は、神への献身、謙遜、称賛に値する肉体の鍛錬に見えるという点で、多くの人々にとって知恵のように見えると教えられています。しかし、パウロはこれらの規則は本当の知恵とは何の関係もなく、彼らが表現しているように見える礼拝も謙虚もどちらも偽りであると断言しています。彼の最終的な評価は、禁欲主義は惨めな失敗であるというものです。表面的には霊的勝利への道に見えるかもしれませんが、実際はそうではありません。キリスト教は処方箋の宗教ではなく、イエス・キリストとの生きた関係の宗教なのです。」まさにそのとおりでした。私たちの罪の赦しも、成長も、私たち自身のうちにではなくて、ただキリストと一つとされていることにかかっているのです。キリストとともに生き続けていくということこそが、私たちひとりひとりの歩みにとって欠かすことのできない鍵でした。かつてパウロもこのように口にしていました。ガラテヤ2：20「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」パウロも同じでした。キリストとともに生きていたのです。私たちも同じです。だから決して忘れてはいけません。罪と罪過の中に死んでいたそんな私たちを救い出してくださったのは、ほかのだれでもない主イエス・キリストでした。人の行いでも世の慣習でもなかったのです。キリストの割礼を受けて、キリストとともにバプテスマを受けた者はみな、キリストにあって救われたのです。神様に対して数え切れないほどの罪を犯して、あまりにも大きな負債を負っていたそんな私たちの罪を赦してくださったのも、ほかのだれでもない主イエス・キリストでした。人の特別な神秘的な体験でも感情でもありません。生まれながらに犯し続けていたすべての罪も、私たちを責め立て続けていたその債務証書も十字架に打ちつけられ神の御子が代わりとなって死んでくださいました。キリストの十字架にあって、完全な罪の赦しはすでに成し遂げられたのです。罪の奴隷として歩いていてサタンの支配から逃れられなかったそんな私たちを解放してくださったのも、ほかのだれでもない主イエス・キリストでした。自分自身の自己否定でも、自分の欲を鍛錬することでもありません。神様に逆らっていたその敵は、キリストにあってすべて打ち砕かれ、完全な勝利が成し遂げられたのです。ただキリストの十字架にあって、もうすでに最高の勝利宣言はなされました。十分なものは、イエス・キリストでした。このイエス・キリストこそ、すべてにおいて、すべてでした。私たちが唯一誇りとするべきものだったのです。

だからもし、まだこの十分なキリストを知らない方があるなら、どうかきょう知って帰ってください。みことばははっきりと教えていました。私たちがこうやって偽りの教えをいくつも見てきましたが、それを見ても明らかでした。私たちのどんな良い行いであろうと、知恵であろうと、何であろうとも、私たちは自分自身に決して救いをもたらすことはない、ということです。一切の汚れを受け付けることのできないそんな聖なる正しい神様の前に、自分の努力で近づけるような者はひとりもいませんでした。ただ恵みによって、信仰によって、キリストによってのみ、救いは与えられるのです。禁欲主義を含めて、偽りの教えには決してできないことを、十分なキリストがすでに成し遂げてくださいました。だからもしこの方を知らないのなら、自分の罪をきょう悔い改めて、そしてこの主を自分の救いとして、主として信じ受け入れてください。

もうすでにこのキリストを信じ従っているとされる皆さん。誤った教えにだまされないことです。キリストだけでは十分ではない、そんなふうにならぬ私たちに惑わす偽りの教えにだまされないことです。律法主義も、神秘主義も、禁欲主義も、どれも救いや霊的な成長をもたらすことはありませんでした。でも、そのような教えの脅威はずっとあり続けたのです。だからこそ、私たちはいつも本体であって、かしらであるそのキリストに目を向け続けていることです。私たちはいつも覚えることができます。私

たちがキリスト・イエスを信じ受け入れたのであれば、もう私たちはひとりで歩んでいるではありません。私たちはキリストとともに死に、キリストとともに葬られ、キリストとともにみがえりました。今私たちはそのキリストとともに歩んでいるのです。そのキリストとともに歩み続けて、そのキリストに拠り頼みながら生きていくことです。この主を愛しているからこそ、だからこの主のために自分を鍛錬して、この主を愛しているからこそ、この主の栄光のために歩んでいくことです。この方こそ、十分なお方でした。パウロは「この方が十分だ」と言ったそのあとで、そのキリストにあつての生き方を3章から教えてくれています。来週からはその生き方を見ていきます。でも皆さん覚え続けることです。私たちにとって十分なキリスト、その偉大さを、です。この主を覚えながら今週も歩んでいきましょう。